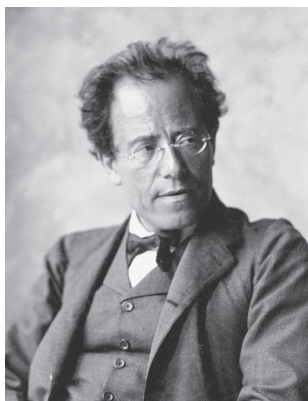


マーラーとR.シュトラウス

—時代を先導した才能の交流

江藤光紀

グスタフ・マーラー
(1860～1911)リヒャルト・シュトラウス
(1864～1949)アルマの描く
R.シュトラウス

マーラーの妻で、自身も才能豊かだったアルマの回想録(『グスタフ・マーラー——愛と苦悩の回想』石井宏訳、中公文庫)は、この作曲家を理解するうえで貴重な資料だが、才女の手になるだけあって、読み進めていくうちにアルマの独特な感性で見ていることをつい忘れてしまう。とりわけR.シュトラウスは商売感覚に長けた、そして悪妻の尻にしかれる皮相な芸術家とし

て描かれている。語り口は見事で、この大家が少々お気の毒になるほどだ。

回想録が出版された当時(1940年)は、ナチの暴政の真ただ中。ユダヤ人マーラーの業績が消し去られる一方、シュトラウスはナチといざこざを起こしたとはいえ、重鎮として高い名声を誇っていた。アルマの内心を察するに、作曲家として充分には評価されないまま50歳で世を去ったマーラーに対し、彼は恵まれすぎていたのだろう。

シュトラウスはミュンヘンの宮廷劇場で名手として鳴らしたホルン奏者を

父に持ち、ソプラノ歌手として活躍した妻をもらって、若くしてエリート街道を歩んだ。音楽面では、リストに始まる交響詩の流れを汲み、イメージを音へと変える術に天賦の才を見せた。生と死、愛といった観念はもちろんのこと、日の出や日没、嵐、動物たちの鳴き声に始まり(アルプス交響曲)、果ては家庭の団欒から閨房の秘めごとまで音で表現した(家庭交響曲)。自らを英雄に見たて同僚や評論家の攻撃に勇ましく立ち向かうさまを、たぐい稀なオーケストレーションでドラマ化した(英雄の生涯)。楽天家でなくてはできないような悪趣味ぶりだが、そこに聴衆は喝采した。

マーラーの音楽も、あるところまで標題性を帯びている。例えば、運命の力との壮絶な戦いを描いた〈悲劇的〉(交響曲第6番)では、闘争が愛によって癒やされ、カウベルがのどかな田舎の情景を呼び覚まし、ハンマーが運命の一打を振り下ろす。

違いは中世のトリックスター、ティル・オイレンシュピーゲルのように(シュトラウスにはこの人物を主人公にした交響詩がある)、易々と俗に降りていって毒の効いた風刺や笑いも芸にするか、ハイ・カルチャーの矜持を保つかである。それはまた、粗削りなバイエルン人と、おぼつかない立場を余儀なくされるユダヤ人の違いでもあった

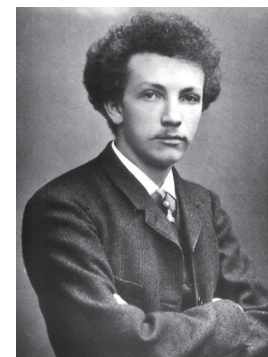
のだろう。後年、マーラーは標題性から離れていくが、シュトラウスとの差異化を図る気持ちも働いたのではなかろうか。

時代をリードする二人

マーラーとシュトラウスはなるほどタイプは正反対だったが、互いの才能に敬意を払い、相手の作品を世に出すべく骨を折った。もちろん打算もあっただろうが、それも才能を認めあっていればこそである。「シュトラウスと私とは、同じ山の坑道を別々の側から掘っているのだ」というマーラーの言葉が、彼らの関係をよく表している。

二人が初めて出会うのは1887年、シュトラウスが自作の二短調交響曲を指揮するためにライプツィヒを訪れた時のことだ。シュトラウスは23歳で、マイニンゲンの宮廷歌劇場を経てミュンヘン宮廷歌劇場の第三楽長。27歳

のマーラーは、カッセルやブラハを経てライプツィヒ市立劇場の第二楽長。若い二人はその時から意



若き日のシュトラウス

気投合した。この後、ミュンヘンからワイマールに移ったシュトラウスはマーラーの〈巨人〉(交響曲第1番)を取り上げ、またベルリンで〈復活〉(交響曲第2番)の一部をマーラーが指揮する機会を作っている。一方、マーラーもハンガリーのオペラ座を経てハンブルクの音楽監督に就任すると、シュトラウスの歌劇〈ゲントラム〉を舞台に掛けるべく働きかけているが、同時に自分のポストをシュトラウスが狙っているのではないかと^{おそ}いう畏れも抱いた(実際には、シュトラウスは副楽長としてミュンヘンに戻った)。

1897年、マーラーはウィーン宮廷歌劇場の音楽監督に就任。翌年、シュトラウスはプロイセン宮廷第一楽長としてベルリンへ赴く。二人は昇り龍のように出世街道を駆け上り、出会いから10年余りで頂点近辺に到達している。とはいえ、成功の仕方もまた対照的だった。指揮者としてはマーラーが一步先んじていたが、編成の巨大なマーラーの交響曲は上演が難しく、一方、シュトラウスの交響詩は作曲する前から大成功を収めた。1902年には、マーラーがシュトラウスの歌劇〈火の欠乏〉をウィーンで初演する一方、全ドイツ音楽協会の会長でもあったシュトラウスは、長く全曲演奏のかなかったマーラーの第3交響曲の初演の手助けをしている。



劇場の入口でマーラーに出迎えられたシュトラウス
(1906年、グラーツでの〈サロメ〉公演)

〈サロメ〉の成功

1905年5月、アルザス音楽祭でマーラーは交響曲第5番を、シュトラウスは〈家庭交響曲〉を指揮した。充分に下稽古を付けたマーラーに対し、直前に駆けつけたシュトラウスの演奏は散々だったとアルマは書いている。この滞在時に、シュトラウスは作曲中だった歌劇〈サロメ〉をマーラーに弾いて聴かせた。^{とてつ}途轍もない音楽であることを察したマーラーはウィーンでの上演を企てるが、若い娘が預言者の生首に接吻するという背徳性ゆえ宮廷劇場での上演は許可されなかった。

〈サロメ〉はドレスデンで初演された翌年、グラーツでも舞台に掛けられた。ウィーンの上演禁止作がドレスデンで大当たりを取ったという噂^{うわさ}を聞きつけ、ヨーロッパ中から要人が集まった。マーラーもここで初めて〈サロメ〉を観たが、その官能性・革新性になる一方で、前作よりもはるかに前

衛的な〈サロメ〉がなぜ大衆に迎えられたのかが理解できなかった。

その後も二人は旅先でしばしば落ち合った。特にザルツブルクでは滞在の多くの時間を共に過ごし、シュトラウスは作曲中の歌劇〈エレクトラ〉をマーラーに弾いて聴かせた。しかし、成功街道の真ただ中であって自らの言動に頓着しないシュトラウスと、それに複雑な思いを抱くマーラーの距離は広まっていった。シュトラウスの才能のまばゆい輝きに魅せられながらも——いや、それゆえになおさら、彼の言動にマーラーの繊細な心は傷ついたのである。

マーラー亡き後のシュトラウス

〈サロメ〉の成功で富を得たシュトラウスは、ベルリンの歌劇場の職を辞してオペラの作曲に重心を移していく。一方、ウィーンを去ったマーラーはアメリカに渡りメトロポリタン歌劇場やニューヨーク・フィルを振ったが、そこには割のよい仕事によっていずれはシュトラウスのように作曲に専念したいという^{もくろみ}目論見もあった。また、マーラーはアメリカで半ダースに及ぶシュトラウスの交響詩を、シュトラウスは指揮活動を縮小するなかでマーラーの〈巨人〉や第3番、第4番を演奏し

ている。個人的な関係がどうであれ、目指す方向も互いの才能への敬愛も変わらなかったのである。

1911年、マーラーはニューヨークで重い病を発症し、パリに移送されウィーンで没した。この年、シュトラウスは歌劇〈ばらの騎士〉でまたもや大成功を収める。ホフマンスタールとの協業は新しい創造^{よくや}の沃野をもたらしたが、そこにはもはや〈サロメ〉のような先鋭さはない。シュトラウスの後年のオペラを聴いたら、マーラーは何と言っただろうか。

1918年になるとシュトラウスはフランツ・シャルクとともに、宮廷劇場から衣替えしたウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任する。マーラーが辞任して10年あまり後のことだから、旧友の痕跡を劇場のあちこちで発見したことだろう。新しい音楽監督は翌年の南米旅行で〈巨人〉と第4番を取り上げ、亡き前任者への敬意を表した。

ナチが政権を取ると、シュトラウスは帝国音楽院総裁へと担ぎ上げられ、ユダヤ人マーラーの作品は禁止された。そして戦後、荒廃した国土を前に、シュトラウスは甘美で痛切な白鳥の歌を歌う(4つの最後の歌)。指揮者ワルターら伝道師たちによって細々と伝えられたマーラーの芸術に本格的に光が当たるのは、もう一世代あとのことである。(えとう みつり・音楽評論家)

読売日本交響楽団 「第10代常任指揮者」に セバスティアン・ヴァイグレ氏が就任



読売日本交響楽団は、第10代常任指揮者にセバスティアン・ヴァイグレ氏 (Sebastian Weigle／57歳) を迎えます。現 (第9代) 常任指揮者シルヴァン・カンブルラン氏の後任で、任期は2019年4月1日から2022年3月末までの3年間です。

これに伴い、カンブルラン氏は19年4月から桂冠指揮者となります。

ヴァイグレ氏選任にあたって 理事長 小林敬和

読響は第10代常任指揮者に、セバスティアン・ヴァイグレ氏を迎えます。読響のさらなる芸術性向上につながればと、期待しております。

現在の第9代常任指揮者、シルヴァン・カンブルラン氏は2010年4月の就任以来、フランス音楽や近現代の作品を数多く取り上げ、オーケストラの水準を引き上げて下さいました。

この好調を受けて、読響は次に何を追求すべきか。私たちは次期常任指揮者の選考に当たって熟考しました。そこで重視したのは、いわゆる「オーケストラ・ビルダー」として読響の水準をさらに引き上げる手腕、オーケストラ・レパートリーで中核をなすドイツ

音楽への適性、読響との相性や将来の発展性、などでした。

数々の指揮者を客演に招くなかで、抜群の力量を示した一人がヴァイグレ氏でした。16年8月に指揮したR. シュトラウスやブラームスと、翌17年7月に二期会で振ったオペラ〈ばらの騎士〉は、お客様や評論家はもとより、楽団員からも大変好評でした。気さくでユーモアある人柄でも、私たちを魅了しました。

様々な調整の末、昨年秋に正式オファーをし、常任指揮者就任を快諾して頂きました。ヴァイグレ氏と読響が切り開く新時代に、どうぞご注目ください。

プロフィール セバスティアン・ヴァイグレ Sebastian Weigle

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで90年代後半から本格的に指揮をはじめた。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、07年にはワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉でバイロイト音楽祭にデビュー。08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団を指揮し、国際的に活躍している。読響には2016年8月に初登場して三つのプログラムを指揮し、好評を博した。2017年7月には、東京二期会のR. シュトラウス〈ばらの騎士〉で再度共演し、大きな話題を呼んだ。



ヴァイグレ氏からの メッセージ

常任指揮者として重要なのは、
オーケストラの潜在能力を
最大に引き出すこと。

この度、読売日本交響楽団の第10代常任指揮者に決まり就任できることは、大変誇りであり、名誉なことと思っています。ちょうど第10代という節目であることにも、何か運命的なものを感じます。これまでの歴代の常任指揮者がそれぞれ足跡を残し、この素晴らしいオーケストラを成長させてきました。私も第10代として、自分なりの刻印を残せたらと願っています。

読響には、2年前に3プログラムの演奏会で初めて客演し、昨年は東京二期会でのR.シュトラウス〈ばらの騎士〉で再び共演しました。コンサートとオペラでは異なる部分があるのですが、どちらでも楽団員一人一人が自発性を持って取り組んでおり、好奇心旺盛なオーケストラという印象を持ちました。〈ばらの騎士〉の際、楽団員がとても楽しそうに演奏していたのを覚えています。本番では100%の集中力を持ち、舞台上など周囲にアンテナを張りめぐらせ、何か新しいこと吸収しよ

うとしているように感じました。その結果、本番を重ねる度に、新たなものが加わり、演奏はどんどん良くなっていきました。

来年、常任指揮者に就任しましたら、まずは私のイメージする音楽を、楽団員の皆さんと共に具現化できるように努めます。また、楽団員には素晴らしい技術を持っている方や、海外で勉強するなど経験豊富な方も多くいますので、彼らの潜在能力を最大に引き出すことが私の最も重要な仕事だと思っています。

日本には、1983年にベルリン州立歌劇場のソロ・ホルン奏者として初めて来て以来、度々訪れています。恐らく21回来日しています。日本の各地で会う方々のおもてなしの心には、毎回とても感激しています。もちろん日本食も大好きです。

来年から読響の皆さんと演奏できること、また読響のファンの皆様と会場でお会いできることを、心から楽しみにしています。

(談)

2大巨匠の衣鉢を継ぐ 俊英への期待

昭和音楽大学客員教授 広渡 勲



ヴァイグレ氏は元々、ベルリン国立歌劇場管弦楽団のソロ・ホルン奏者。1983年の引っ越し公演では、日本でも信奉者が多いドイツの名指揮者、オトマール・スイトナーの棒でベートーヴェン〈フィデリオ〉などを演奏しました。後に、当時の私の勤務先がこの歌劇場の招へいを引き受けることになって、接点が生れます。

私が関わり始めた1997年の引っ越し公演で、ヴァイグレ氏はすでに指揮者になっていて、モーツァルトの歌劇〈魔笛〉を5公演中2回、振りました。彼の師である音楽総監督ダニエル・バレンボイムから強く推されたものの、まだ若くて無名だったので不安を抱く私を、名テノールのペーター・シュライヤーが「非常に優秀で大丈夫だから」と説得してくれました。公演は大成功

で、とても透明感ある指揮に感心しました。これが、ヴァイグレ氏が指揮者として日本で

記した第一歩だったのです。

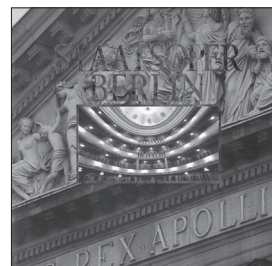
バレンボイムのアシスタントからはアントニオ・パッパーノやクリスティアン・ティーレマンら、そうそうたる指揮者が出ました。歌劇場育ちの指揮者は、本番の舞台上で起きるあらゆる事態に対応できる手腕を備えています。歌手やダンサー、舞台技術者など様々な人々を束ねる管理能力も高く、チームワークが得意です。

この何年か、日本でヴァイグレ氏が指揮する演奏を聴く機会が増えました。いずれも端正かつオーソドックスな解釈で、私が考えるオーセンティック（正統派）なイメージ通りの音楽作りでした。

彼はスイトナーとバレンボイムという2大巨匠の背中を見て育ちました。だからドイツ音楽本流の伝統的な良さが出せる。この二人の「良いとこ取り」ができる強みは凄い。いろいろな意味でいま日本一の読響とのコンビが、楽しみでなりません。（聞き手・事務局）

profile ひろわたり・いさお

1970年代から日本舞台芸術振興会（NBS）および東京バレエ団の制作プロデューサーとして活躍。2003年から昭和音楽大学で教鞭をとる。



1997年11月ベルリン国立歌劇場の日本公演のプログラム（表紙）

心に残るクラシック

加藤一二三 — ③

Hifumi Kato

声に出して歌う喜び

ヴェルディ：“女心の歌”（歌劇〈リゴレット〉から）



©読売新聞社

私は1970年のクリスマスに洗礼を受けてカトリック信者になりました。洗礼を授けてくださったのは今は亡きヨハネ・マンテガッツァ神父です。以来、私は40年以上も日曜日に教会のミサに通い、祈りの歌を捧げています。祈りはカトリック教会において最大の奉仕とされています。上手に歌うことが目的ではありません。祈りの言葉を声に出すことが大事なのです。聖アウグスティヌスは「歌う人は2度祈る」とおっしゃいました。それで歌えるものは5曲あります。聖アウグスティヌスの祈りも、その一つです。

祈りは教会だけでするものではありません。将棋の対局の時に、会場となる旅館の庭などで、よく昼休みに声に出して祈っていました。聖歌はまずメロディーが美しいのですが、そこに祈りの気持ちを込めるのです。すると晴れ晴れとした気分になり、ふさいだ心を慰めてくれます。そうやって気分転

換を図り、自分のテンションを上げる。そういうことを繰り返すうち、音楽がどこからみても私自身のものになり、次第に歌がうまくなっていったのでしょう。これこそ人生の喜びです。

祈りの歌を聴くのも好きです。昔、梅原龍三郎画伯の娘さんから教えてもらったグノーの〈聖セシリアの祝日のための荘厳ミサ曲〉とか、ミッションスクールに通っていた娘たちが習っていたハイドンのオラトリオ〈天地創造〉とか。何度聴いても感銘を受けます。

ところで、マンテガッツァ神父と家族そろってモーツァルトのオペラ〈フィガロの結婚〉を観に行ったことがありました。モーツァルトの歌はもちろん素晴らしい。その時、神父がおっしゃったのです。「ヴェルディの〈リゴレット〉もすばらしいオペラですよ」と。

時は流れ、数年前、レギュラー出演していたテレビ番組で歌を披露することになりました。私が選んだのは、奇

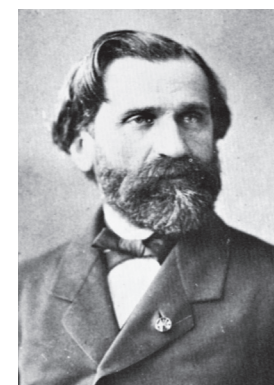
しくも“女心の歌”（〈リゴレット〉第3幕、マントヴァ公爵のカンツォーネ）。収録前の打ち合わせの時、私は自信満々で臨みました。ところが、最初に私の歌を聴いた番組関係者は、急に予定外のレッスンをしようと言い出しました。「これはものにならん」と思われたようです。そこで、私は聖アウグスティヌスの祈りを歌いました。すると今度は「すばらしい！」となり、それがきっかけで調子が上がってきた。私は歌うことが本当に好きなんです。「女は気まぐれ」と歌う“女心の歌”は、祈りとはほど遠い内容ですけど。

〈風の中の はねのように
いつも変わる 女ごころ……〉

もちろん本番収録までに猛特訓しましたよ。共演したマツコ・デラックスさんは、わざわざ練習を見に来てくれた。きっと心配だったのでしょう。「高音のところ、大丈夫？」と言われました。世紀の大テノール、ルチアーノ・パヴァロッティが歌う“女心の歌”のDVDを観て研究もしました。そうやって曲を知れば知るほど、歌いやすいと思うようになった。イタリア語の発音だって難しくない。

本番では1000人のお客さんを前に、1番を日本語の歌詞、2番をイタリア語で歌いました。本番前日の夜、番組のプロデューサーは、私の歌があまりに

不出来で、みんなから責められる夢を見たそうです。しかし、本番が終わった後、こう言ったのです。「さすがはプロ棋士ですね。本番に強い！」



ジュゼッペ・ヴェルディ (1813～1901)

とにかく歌うことが好きなのです。そもそも音楽を愛していますし、曲の良しあしもわかる。それについては自信があります。だから、どんな場面でも歌う前に緊張することはありません。「昼ご飯抜きで練習しましょう！」と言われても、楽しいものは楽しい。今年の1月にニューイヤー・コンサートに出演した際、この歌を再びステージで歌う機会がありましたが、共演したソプラノ歌手の方から「高音がよく出ますね」とおっしゃっていただき、ますます自信を深めました。

そうそう、昨年の大みそかには、NHK「紅白歌合戦」のゲスト審査員を務めました。本当は歌手として出場したかったのですが、それはさておき、私は紅組に軍配を挙げた。結果は白組勝利でしたが、私の判断では、やっぱり女心を歌った曲が良かったと思うのです。
(聞き手・事務局)

◎ヴィオラ奏者

正田響子

Kyoko Shoda

温かく情熱的な音色に 魅せられて

「早速ですが、6月公演の聴きどころを教えてください」

やはりヴィオラ奏者としては、R. シュトラウスの交響詩〈ドン・キホーテ〉でしょうか。独奏チェロと独奏ヴィオラが、主人公ドン・キホーテと従者サンチョ・パンサの役を演じているのですが、それぞれのキャラクターの性格が、各楽器の特徴を効果的に生かしてよく表現されています。独奏ヴィオラは学生の頃から大変尊敬している、読響ソロ・ヴィオラ奏者の柳瀬省太さん。温かい音色を奏でる、ユーモラスで素敵なお方です。物語のある曲なので、場面を想像すると聴きやすいかと思います。シュトラウスの華やかでロマンチックなハーモニーも大好きです。

「東京都出身の23歳。桐朋女子高校、桐朋学園大学音楽学部を卒業。2013年、ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクールで第1位となり、ザルツブルクにあるミラベル宮殿で演奏しました。大学3年の時にヴァイオ

リンからヴィオラに転向、昨年9月に読響に入団」

母がピアノをやっていたこともあり、5歳の時に知人の勧めでヴァイオリンを始めました。小さい頃から「風の谷のナウシカ」などスタジオジブリ作品が大好きで、特に物語を盛り上げてくれるオーケストラの音楽に夢中になって、サウンドトラックをよく聴いていました。小学校の卒業アルバムに「将来オーケストラに入るのが夢」と書いたのを覚えています。

しかし、音楽が嫌になってしまった時期もありました。日々の練習やコンクールなどで心から音楽が楽しめず、楽器を辞めたいと思ったのですが、「音楽は競い合うものではありません。好きなこととして、自分のペースで長く続けていけば良いのですよ」という当時の先生の言葉に励まされ、改めて音楽の道を志すことを決めました。

大きな転機は、大学1年で「副科」としてヴィオラを履修した際の、佐々木亮先生(N響ヴィオラ首席)との出会い。佐々木先生のヴィオラを聴いて、自分の知っていたヴィオラの音とは全く違う、深く心に迫る情熱的な音色に感銘を受け、「先生のようなヴィオリストになりたい、いつかこんな音色を



奏でられるようになりたい」と、ヴィオラへの転向を決めました。今でも先生のレッスンを受けていますが、道は果てしなくまだまだ勉強中です。

「ヴァイオリンとヴィオラの違いは何ですか」

まず大きさが違います(笑)。大きく重いので、支える筋力や身体への負担が少ない構え方などの工夫が必要です。また、弦が太く音が低いので、ヴァイオリンより反応が遅れがち。周囲へのアンテナをよく張り、タイミングを予測して弾かなければいけません。オーケストラでは内声部を担うので、役割が大きく違います。調和や協調を大切に、時にはアツく攻めます。私はヴィオラの温かい音色が大好きなので、皆さんにも好きになってもらえたら嬉しいです。

「団内では最年少の年代ですが、読響はいかがですか」

大学在学中に聴きに行った初めてのオーケストラが読響でした。演目は、チャイコフスキーの交響曲第5番。オーケストラがまるで一つの生き物のようで、その美しさに圧倒され、今までの自分の価値観が吹き飛ばすような感動を味わいました。入団後も、パワフル

でエネルギッシュ、そして個性的な読響にいつもわくわくしています。

私自身、音楽は文字通り楽しむものだと思います。そのためには日々の練習や勉強が欠かせません。自分が弾くだけでいっぱいはいっぱいでは、楽しめないのです。ソロ・ヴィオラ奏者の鈴木康浩さんをはじめ、セクションの先輩方にも基礎的なことなどをよく質問させてもらっていますが、皆さんとても熱心に教えてくださいます。

「煮詰まったらとりあえずトイレ掃除をする、と聞きました」

初めての曲ばかりで、とにかく譜読みの生活。頭を切り替えるため、煮詰まってきたらトイレを無心で掃除します(笑)。性格的に一つのことには夢中になり、周りが見えなくなってしまう猪突猛進タイプなので、新人ではありますが、落ち着いてやっていこうと心がけています。

“コバケン” 渾身のチャイコフスキー & 名匠ヴィルサラージェが共演

7/5 (木) 19:00 第580回 定期演奏会
サントリーホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番
チャイコフスキー：マンフレッド交響曲

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）
ピアノ：エリソ・ヴィルサラージェ



小林研一郎



エリソ・
ヴィルサラージェ

フランスの俊英モルローとジャズ界の鬼才・小曽根真の熱いライブ！

7/28 (土) 14:00 第208回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

7/29 (日) 14:00 第208回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ガーシュイン：キューバ序曲
ガーシュイン：ラブソディ・イン・ブルー
ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲
エネスコ：ルーマニア狂詩曲 第1番
ラヴェル：バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉 第2組曲

指揮：ルドヴィク・モルロー
ピアノ：小曽根 真



ルドヴィク・モルロー



小曽根 真

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー・サマーフェスティバル	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
パルテノン名曲	一般 ¥4,800			
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100
福岡公演	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,000	

7月 公演の聴きどころ

7月5日の《定期演奏会》には、読響・特別客演指揮者の小林研一郎が登場し、得意のチャイコフスキー作品から〈マンフレッド交響曲〉を取り上げる。この交響曲は、イギリスの詩人バイロンの劇詩に基づいた4楽章構成の表題音楽。アルプス山中の城主である主人公マンフレッドが、人間の小ささや宿命に懐疑を抱いて苦悩しさまようというストーリー。演奏機会は多くないが、小林はロンドン・フィルやチェコ・フィルと録音を重ねるなど、強い思い入れを持つ。“炎のマエストロ”が悲劇的な物語を重厚でドラマチックに描くだろう。終楽章の最後で壮大に鳴り響くオルガンにもご注目を。前半のベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番では、ロシアン・ピアノリズムの伝統を継承するヴィルサラージェが共演する。随所に見られる大胆な和声や転調などの革新的な試みを、円熟を深める巨匠が骨太なソロで印象づけるだろう。

7月28、29日の《マチネーシリーズ》では、ジャズ界の鬼才として国際的に活躍する小曽根真が登場。ニューヨーク・タイムズ紙で「クラシックのテクニックとジャズの自由な表現を存分に発揮し、新しい音楽世界を見せてくれた」と絶賛されたガーシュインを熱演し、舞台を“オゾネ・ワールド”に染める。〈ラブソディ・イン・ブルー〉の思わず口ずさみたくなるようなメロディやスウィングをお楽しみに。指揮は昨年ベルリン・フィルにデビューしたフランスの俊英モルロー。お国もののフランス音楽から、官能的なまどろみを扱ったドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉や、精緻かつダイナミックなラヴェルのバレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲を披露する。

（文責：事務局）

こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※ 初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

名匠・大友直人が〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉を一挙披露！

8/18 (土) 14:00 読響サマーフェスティバル2018《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：大友直人



大友直人

「情熱大陸」で話題を呼んだ反田恭平ら若手ソリスト3人が登場

8/21 (火) 18:30 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番

指揮：大井剛史

ヴァイオリン：岡本誠司

チェロ：ラウラ・ファン・デル・ヘイデン

ピアノ：反田恭平



大井剛史



岡本誠司



ラウラ・ファン・
デル・ヘイデン



反田恭平

欧州で活躍するストルゴーズが指揮する傑作〈新世界〉

8/25 (土) 14:00 第209回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

8/26 (日) 14:00 第209回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈フィンランディア〉
シベリウス：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ヨーン・ストルゴーズ ヴァイオリン：シモーネ・ラムスマ



ヨーン・ストルゴーズ



シモーネ・ラムスマ

フィンランドの名匠と日本を代表するピアニストが注目の共演

8/30 (木) 19:00 第614回 名曲シリーズ
サントリーホール

9/1 (土) 15:00 第11回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

アレクサンドレスク：秋の黄昏時
ショパン：ピアノ協奏曲 第1番
シベリウス：交響曲 第2番

指揮：ヨーン・ストルゴーズ ピアノ：小山実稚恵



小山実稚恵

新鋭バ스티アンのタクトが生む華麗なる〈ボレロ〉

9/5 (水) 19:00 第21回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

9/6 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲
ドビュッシー：交響詩〈海〉 ラヴェル：ボレロ

指揮：ジョセフ・バスティアン ヴァイオリン：神尾真由子



ジョセフ・
バスティアン

“色彩の魔術師”カンブルランの《チャイコフスキー名曲選》

9/15 (土) 14:00 第210回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/16 (日) 14:00 第210回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

チャイコフスキー：幻想序曲〈テンペスト〉、
ロココ風の主題による変奏曲、交響曲 第4番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) チェロ：アンドレイ・イオニーツァ



シルヴァン・
カンブルラン

カンブルランが鮮やかに描くブルックナー〈ロマンティック〉

9/21 (金) 19:00 第615回 名曲シリーズ
サントリーホール

9/23 (日) 祝 14:00 第106回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

モーツァルト：歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲、ピアノ協奏曲 第24番
ブルックナー：交響曲 第4番〈ロマンティック〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ピアノ：ピョートル・アンデルシェフスキ



ピョートル・
アンデルシェフスキ

音楽の力とは？ カンブルランが届ける未来への熱いメッセージ

9/28 (金) 19:00 第581回 定期演奏会
サントリーホール

ペンデレツキ：広島への犠牲者に捧げる哀歌
シマノフスキー：ヴァイオリン協奏曲 第1番
ハース：静物 ラヴェル：ラ・ヴァルス

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ヴァイオリン：諏訪内晶子



諏訪内晶子

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

大田区民ホール・アプリコ開館20周年記念事業 小林研一郎&三浦文彰 with 読響

■7/8(日) 15:00 大田区民ホール・アプリコ 大ホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：三浦文彰

シベリウス：交響詩〈フィンランディア〉

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

ベートーヴェン：交響曲 第7番

[料金] S ¥4,500 A ¥3,500 U25シート ¥2,000

[お問い合わせ] 大田区民ホール・アプリコ 03-5744-1600

東京二期会オペラ劇場 歌劇〈魔弾の射手〉

■7/18(水) 18:30、7/19(木) 14:00、7/21(土) 14:00、
7/22(日) 14:00 東京文化会館 大ホール

指揮：アレホ・ペレス 演出：ペーター・コンヴィチュニー

出演：大沼徹、米谷毅彦、嘉目真木子、富平安希子、
清水宏樹、片寄純也 ほか(18、21日)

藪内俊弥、伊藤純、北村さおり、熊田アルベルト彩乃、
加藤宏隆、小貫岩夫 ほか(19、22日)

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉(原語歌唱・日本語台詞上演／日本語・英語字幕付き)

[料金] S ¥15,000 A ¥13,000 B ¥10,000 C ¥8,000 D ¥6,000 学生 ¥2,000
(18、21、22日)

S ¥13,500 A ¥12,000 B ¥10,000 C ¥8,000 D ¥6,000 学生 ¥2,000
(19日・平日マチネ特別料金)

[お問い合わせ] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

フェスタサマーミュージザ KAWASAKI 2018

読売日本交響楽団 シネマ&ポップス

■8/1(水) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：渡辺俊幸 歌：森山良子

〈ディズニー・ファンタジー〉序曲

映画〈スターウォーズ〉～レイア姫のテーマ、ダース・ベイダーのテーマ ほか

《森山良子の世界》

涙そうそう、家族写真、エターナリー、虹の彼方に ほか

《渡辺俊幸の世界》

森と大地への讃歌、NHK テレビドラマ「大地の子」～メインテーマ

[料金] S ¥5,000 A ¥4,000 B ¥3,000

[お問い合わせ] ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200